



中村俊定文庫  
文庫 18  
330  
1



寶曆五  
紀逸吳譜

硯  
卷  
五

二

硯

卷

七

七

目序

あまの古くもまはる中納言と  
乃黄の娘月夜度との標  
大長乃河多結説いつ都  
歌の願みと好む河を  
あはれは世流と一  
此世の宗通  
江都平元と海我區

取試千數君紙初之十餘の  
独坐身仙を牛車一四時危能  
上徳をとりて被るは幾代續不  
以のこの流するの石之代と  
題一梅本入りち里見は堂の  
海縁取つては女是其年月と  
まの母の年信はあはれや終て

諸家能詩の對しては好悪不  
難よとも勅子能珍貴も編  
後とて名はりて流の  
人々も其流に居る也

七十二叟  
去

宝曆五乙亥案

秋八月



點譜

王母林

倍

桃李芳園

廿五点

開瓊筵坐巷

二十二

天倫樂事

十五二

以文章

十二

陽春

七二

雁字屯

四時庵倚柱子紀逸



第一

甘棠

一枝過海峯西東之河之  
 抱一車之夏之汲之知  
 箸揚枝旋能功名を笑ゆ  
 蕭然をり不辨之のめ  
 之的といふ是子張の  
 ありと終る通る終る

仮初結神みま星女神乃家  
 とらきりしと何し精色  
 了胸をくくく憂い深きと  
 扱込時を多刻半也し  
 加れ岩衣走りく光明寺  
 けく先のきく鼻臥押之勢  
 鯛子み系鯉の遊らふし  
 細帯をまふ時乃月

のきりしひき路の雁新し  
 果あ塚とまきくハとの屋ん  
 岸新甚みと居新く下ん  
 ねをぬくと塚ふるひ出そ  
 梅も如く智人新位金更  
 白くく西の程鏡の橋  
 立ぬとらきり見くも六十丸  
 之ら里あん年奇新仇活

新とてふ鏡の磨りし 垢を門  
鴉の来りて笑ふ 沢 柿  
至秋月ありと栢の年秋とてさ  
る水い敷ふ入秋秋湯  
角力場新まのふもてて子破の関  
神馬乃鬘の流ひ甲斐も然し  
時明里人残寐せり起しとま  
子鞋とて然と ぬ工物と

十身新鳴りたる塔乃 澤  
くま世秋とてさる十露 禮  
恵比寿構色ひと秋袴除所  
喰河と喰く 猫と出と新  
入おもて心や新花もむらあ  
山へ 春と秋習ふ若 芝



五字考

音路の何々

之字考

之字考

神多能

塔如素

之字考

教句 史如里

入お張

長

中二

七園舟

土用芽銭川也松穀のけさ新  
新端平多新多新入り  
初録五足種付ま新花結  
飯穂出へ突出  
庭鳥形も多る  
何々へ何々何々

蟬 緇 小 娘 三 五 形 落 一 柳  
袖 残 曳 水 々 迹 如 不 酌  
備 々 之 乃 以 水 何 人 之 不  
照 々 ぬ 暮 々 之 亦 應 々 々 下  
一 日 残 々 々 々 々 々 鱧 之 々  
丸 嫺 々 出 々 小 日 向 乃 人  
若 焉 壽 切 々 小 紫 流 々 々 々 々  
六 老 僧 々 々 形 々 々 々 々 々 々

虫 跡 々 々 之 妻 遠 々 思 々 月 乃 影  
儀 々 々 々 々 々 々 同 々 々 々 々 々 々  
若 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
水 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
雀 子 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
十 二 一 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
と 々 々 々 々 々 守 守 々 々 々 々 々 々  
々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
⑤ 汝 々 々 々 々 乃 神

眼も何やら白く音も  
 杉魚の舟り元形は抑歌  
 茶合と市場はやうな法甚家  
 植木もあゝと茶子賣  
 人間は懺ふ人々を眼鏡  
 通ふよゝゝハぬらぬハ若  
 四阿はあゝと音もあゝの月  
 うらゝのたも音もあゝハ塔

祇まもあゝ今乃安まあゝと  
 眼もあゝと棟上ハ乃鏡  
 三人とあゝと何れは音  
 下の八日亦尻はあゝと鏡  
 めゝと度と口もあゝと花の咲  
 鶴まゝと音もあゝと音

五字考

四字

金二考

金二考

之三考

蠟燭

蠟燭

燭燭

二字考

ワキ

ワキ

木の子

木の子

分三

其臺

層やまの糸の鳥を口内  
 多水柄抄の陽春を汲  
 花屋新間もよみぬ報章  
 神乃挿挿新鳥の夕  
 鏡の影の杖と出る月  
 形重酒屋のやまき枝

小正を以てつらふもあはれやちしを  
 新ふし鐘をききけし撞  
 去の初周狸をてと灯をたけ  
 報息梅を 喰ふりのまふ  
 そわのてと鐘をほろけつたわ  
 ものしめもふた 文箱  
 坊中中乳母をきけおら  
 眼のま所をくくも華特

初何し鐘波を物よ突うら  
 月初に余を 袋より  
 定紋鼓をふかへて花の幕  
 出舞を法をわひつてはのち  
 琴の音を響もくらす歌歌  
 ちまのてふへ煙を盛  
 独り栗生條像細りわ  
 ろくくふさし夕暮の音

山姥新傳交もあまをきり  
屋敷乃向ふ町をきり  
惟子みねの海りきり  
捨一かきけり  
宋女の原ハ原とあはれ  
後戻りきり  
秋海葉を捨り  
新

射新然と多新皮しり  
新しき  
新しき  
新しき  
新しき  
新しき  
新しき  
新しき  
新しき  
新しき

五字考

角と

四字考

出のり歌集もわ

三子考

志んがや　　男の方

二字考

各句　少強ひ

い　　中　　長　　五

亦四　　杉雨

ハツ目鱧竹葉もたふが　沙を引  
音も　何れも　おぬ　川音  
詩他如心のわな　松を　  
子の音　の　を　を　を　を　  
新完乃　厚を　中　月　ハ　弱  
括　換　を　を　を　を　中　を　を　を　露

勢くは江の浦のふ地乃縁に  
里をくもたれ 句よ 晴  
晴れぬ石のき井戸所を  
白くももねとさき  
今ハ形一昔金賣去  
中ハ能乳母のこゝ 唇  
おはし 中意は  
まゝとて縁をよけり世話

本松と忘れし世の  
月と梅<sup>柳</sup> 市一推し傘  
ふ 魚とゆゑ火影を  
小松のふ小五千度乃札  
糸子と人月 能智恵  
菊卦八軒 尔と里を  
屋げの ねとさき  
とてね 梅とて縁に



ほろりたる清きつねぬはけりけ  
ぬか接子 くらうけ 鐘  
開伽水はきしそぐれ  
流るゝ独活もはぬのそと  
緋柳 丹里の男をきき  
後集もきき 誠心  
頼く浮月如出の夕ちと  
名本抄 木像

國の守はくけりけ  
仙境ちのく 馬鹿を  
おのまゝ今乃  
おのまゝ今乃  
おのまゝ今乃  
おのまゝ今乃  
おのまゝ今乃  
おのまゝ今乃

四字考

もろは新白糸 井と

之字考

予乃乳母 之乃板

之像

二才の考

之縁 糸子

長六

牙五

五津

目と身の中段は、  
と相<sup>ほ</sup>乃 常も 初相乃 教  
詠<sup>よ</sup>進<sup>進</sup>平 侍<sup>せ</sup>池 歌<sup>か</sup>且 垂<sup>す</sup>物<sup>ぶ</sup>  
修<sup>しゆ</sup>在<sup>ざい</sup>の 能<sup>のう</sup>さ<sup>さ</sup>小 撞<sup>つ</sup>も<sup>も</sup>久<sup>く</sup>人<sup>にん</sup>多<sup>た</sup>鐘<sup>かね</sup>  
竹<sup>たけ</sup>瓜<sup>うり</sup>且<sup>且</sup>貝<sup>かい</sup>蟹<sup>かに</sup>り<sup>り</sup>進<sup>進</sup>付<sup>つ</sup>持<sup>ぢ</sup>乃<sup>の</sup>ん  
之<sup>之</sup>ん<sup>ん</sup>至<sup>し</sup>移<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>赫<sup>こく</sup>立<sup>た</sup>を<sup>を</sup>借<sup>か</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>

律義のまゝ丁子小紋ハ似合也  
 訓 條の心と名 事新と云々  
 物 子ハ 意傳出引 杉を以  
 嬉 しい時々 傾城と云  
 名 葉名 款子新 初府佛衣ん  
 顔 の 幸 好く する ありと 喰  
 新 空の 魁斗も 柄 丹 籠 子 あり  
 桑 石の 移 新 一 下 一 八 花

甫 眞く 三 保 新 辰と 袖 あり  
 如 波 得 船と 抱く 意 世々 親  
 月 影 中 横 雲 居 々 墨 籠 あり  
 菌 新 人 ぬ 走 乃 染 新 戸  
 折 栗 の 何 々 也 妙 の 考  
 幼 侍 乃 幸 々 中 低 以 殿 内  
 土 暖 あり 逆 あり 々の 寶 あり  
 ま 人 あり 目 鼻 あり 新 意 あり

鈴蕙 細工色々々々 見まゝ  
竹のそよよも 心よの住連  
鞆籠うけまじも 也口海の音  
家力年段のあやねと下  
侍女 菊姫と續く聊を  
年入志つゝのやまを歌 耳  
霞紅筒を七圍の池も 四女月  
夢ひあて入 廿餘のちこる

簾虫の簾をけし極底  
くくく 癖紙 見す紙中  
身乃世も三斗をさるる  
小蝶 残接く 仕向ふ 蘇人  
神 意 古まの 志西 白あや  
杉へ 禊も つけあくも 蘇

曲字考

曲字考

録女考

三字考

曲字考

録女考

曲字考

二字考

曲字考

録女考

曲字考

録女考

中六

杜谷

梅 綴 五 三 三 中 三 月 和 考 考

梅 綴 三 中 考 猫 綴 考 考

具 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

一日の罪をしのぐは依り  
高りの名無志かき付 嫌  
海よりと嘘に空也 其言  
装禱乃断れ気も在り  
物甚遠多の目あり  
この子に老衰へ 南無阿弥陀  
鶏と馬の如き残煙の夜  
浪舟 儂平 由り 新

松つり縁に 十六日乃月  
勿辨の成る 十六日乃月  
志の既多子方角と重  
松紙の多し 子代に  
去の日久く 南無阿弥陀  
去妻のけり 宮川  
去るる 鴨居も  
子代中 新

片をひしゆと淋しきし縁うま  
 毛を震てし一の秋色叶  
 杜うゝと粒降ししも形うゝ  
 解の塵お健うし 物うゝ  
 古御所ハまゝのまゝおのれ  
 九十九とと歌みよし如  
 老の氷一落しと驚しとあゝ  
 いそぢうは上く果てまゝお 雨露

面をふし小鳥を奇に梅はま  
 以てつゝぬも流ぬ君の代  
 晴しといふ海の鳥はまゝ知た  
 後身目と度洗米知る  
 城も老と若くは花もあ  
 ともうゝ ぬはつゝま草

五字考

呪字

河内守之

九十九

三字考

持竹

之

河内守

乙

考

福

か

長二

牙七

市宝

万葉集に独りし奇居出の事  
 かしこき事と唐系と云ふ事  
 其の事ハ奇居出の事  
 行つた事ハ奇居出の事  
 月影の事ハ奇居出の事  
 地り出つた事ハ奇居出の事



華新者千餘卷の多後まゝ  
子後代坊々 強弱 持銀  
旅人も七ツ目六拍り  
未ト能好まら六地藏也  
管欠乃りしとつみあつては平に  
部在まの結 空法更り行  
意せぬと世間も慮く是時  
ふとく親くと持乃り音あつ

はまゝと名代居人と 持銀  
承も音辨中 西乃洞院  
新の月山と形来のあまの  
四の丁と墨ちり子乃草  
春信新也と音辨中  
換得もと音辨中  
何れの人と音辨中  
まゝと持銀と持る 目録

引出日世帯の流階子  
若白く身能老る 髪結  
錯断とく始に錯断  
味の底もくも味  
も味突くも味 味く掛り  
若者好くも 何れも味  
室の味も味も 味も  
いさねも 蒲萄 一房

新しき味も味も 味も  
子も味も味も 味も  
売車に味も 味も  
新見せ味も 味も  
中も味も味も 味も  
味も味も 味も

五字考

去けり目秋

之字考

蘇 様入

かゆい

こまきり

登句 へいさき

向みせ ちり

牙八 茶外

船と帆を舟なり舟中  
海流の白屋のサ日正月  
古白流梅鶴流只み類とわ  
風吹舟や 去を迎り鐘  
以古よひを継の扱とるまをり  
想もさつふまといはのるは家

彩色あむりしを思ふ宮跡杖  
秀衡の子をよみてひまき  
法善の歩致海の水をきく  
天の川に降りて 掬ひてみる  
よをよへて懐の底を河にかけ  
事なし居る馬車既五夜に明  
平一陳の灯の光はひまき  
茶のくち出しをよみて 常

水鳥乃水を死にまき中  
明く照りたる観念の窓  
縁入ぬこの窓のくちまき月  
よをよへてみる事たれおぼし  
茶の香も伊勢へくちまきの海  
新 狸のくちまき山に 降る  
女房力をよみて居ると掬ひ  
こゝろのくちまき 命ぬ 占

索しつねに水も草もかき清  
雅長持乃冬〜山大住母  
神形今亦少なきを言良新京  
うら〜之也 鯉節 買  
又う袖より沿南新立寒の中  
喜心心〜〜う〜取  
蟻獨と隣みま〜音新〜  
持ぬき自〜河〜八河

棟多水多〜〜  
門〜〜寺乃夕陽  
法〜と飛橋の足取赤縁め  
四十能人〜  
花乃ま律の〜  
松菜抄集と〜

芳園

青山山

四字考 二字考

乙字考

二字考

分三 甚好月

新独々 寺乃夕陽

長四

九

市 栖

梅 水 山 寺 乃 夕 陽  
ま 乙 二 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙  
世 官 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙  
錢 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙  
時 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙  
乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙

上

新在年針立雪も 菜門

佛水おと 何 朝飯

西ふい木竟水通ふも

十九乃其前 我と老その

家力水水のいうと新つけ

神呼吸 戸をぬき

指と其筆其く日新ふと其ふより里

多線り 海り 都府

多線り 海り 都府

附木へ移して 火張ちる

是と守のお中忘るを

掃り 出る菜日 際も也

名残気乃中海り其喜水厚

事掃り人能けぬ 三味線

時形水や丸の袖も

澄り付倦る 未過鳴川

とくしつ法會へ来て火事  
乳母の乳あま つけろけり  
何れもいふに 掃き草の如く  
膠漆 疥癬の如く  
禪林乃慈恵の如く  
肅然とて 湯の如く  
校の本紙 蘇芳の如く  
一敷毛 門乃き

拍子歌 声の如く  
巻葉の如く  
福の如く  
子歌の如く  
遠入 繪馬堂  
其の如く  
川流の如く



五字考

こやこ藤

四字考

ひねりま

かこわ虫

三字考

十九のきん

けろり鳥

二字考

おもしろい機

けり鳥

七三

才十

丹鳳

行水如玉の山出歌等々の系  
 可いなる若葉お 花も枝打戸  
 連歌海の歌も 夜と暮まに  
 めるも中しはぬ 葉籠也しわ  
 名月や旅し 庭はさうのふり  
 花は立おぬ 五羽色なる

ふあね船夕島くちん。

一い〜ゆん 大工才人

我い〜<sup>偷</sup>偷ふし事〜十才後

おし〜言話〜と〜久藤

餅擗お梅〜と岡の考

白い萩乃から歌 金箱

杉坂も言話〜と〜

は〜居〜目〜是歌黄白

桃灯の十八夜を由りみ子

波切〜おき〜と〜 辻駕

芸乃〜量〜と〜 かつ〜

あ合井〜と〜 ちゆ〜

新海〜け〜と〜 掛〜

起〜と〜と〜 悔〜

は〜と〜と〜 本〜

店〜と〜と〜 蔵〜

そけいけい子成管<sup>喰</sup>を以 穀馬  
ふ<sup>り</sup>わ壳能 連<sup>之</sup>之 起  
愛傑と初<sup>る</sup>早<sup>中</sup>ハ<sup>早</sup>々<sup>垂</sup>れ  
戸<sup>と</sup>掃<sup>ふ</sup>一<sup>と</sup>三<sup>と</sup>の<sup>為</sup>主  
生<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>妻<sup>の</sup>秋<sup>夜</sup>吟<sup>の</sup>わ  
又<sup>撰</sup>々<sup>東</sup>坊<sup>主</sup>山<sup>伏</sup>  
半<sup>く</sup>々<sup>々</sup>誰<sup>の</sup>一<sup>く</sup>々<sup>々</sup>  
盤<sup>細</sup>々<sup>墨</sup>家<sup>如</sup>々<sup>々</sup>

柳<sup>枝</sup>の<sup>風</sup>々<sup>々</sup>々<sup>々</sup>々<sup>々</sup>々<sup>々</sup>  
燃<sup>ゆ</sup>一<sup>下</sup> 雲<sup>也</sup>々<sup>々</sup>  
玉<sup>何</sup>々<sup>流</sup>は<sup>何</sup>々<sup>肉</sup>の<sup>ゆ</sup>り<sup>路</sup>  
結<sup>字</sup>の<sup>々</sup>々<sup>井</sup> 傷<sup>ち</sup>々<sup>け</sup>々<sup>何</sup>々<sup>々</sup>  
甘<sup>藪</sup>々<sup>ち</sup>と<sup>中</sup>々<sup>々</sup>々<sup>々</sup>々<sup>々</sup>々<sup>々</sup>  
山<sup>力</sup>々<sup>々</sup>の<sup>輪</sup>々 山<sup>々</sup>々

五字考

古工古入

四字考

款の〜

之考

波の〜

考の〜

坊主の〜

二字考

中

考の〜

〜の〜

考の〜

考十一

萬頃

明皇御流の白子蓮の巾

考の〜乃指を流の〜

唄の流の物の中白の〜

考の中又〜の〜の〜

西の〜の〜の〜

考乃先の〜の〜

考十一

考十一

鹿岡の道まゝとて其の麻の声  
は女の音も又男の音も  
もろゝの揺れは島の人々の  
帆を揺るがせ 峯乃 杉屋  
焼餅ふちきり持のたの何家  
女房中形は低い 従ひ  
し原や長巻と云ふおの  
ある室のまゝと 門のまゝ

帷子袴の流るる風乃月  
鏡の志の葉も 撞初は 鐘  
おの能然と流るる 花の影盡ひ  
垣く 煙の如 陽の光乃 大  
鳴るる 波の音 着るる 衣  
一日も 好む 清く 接つけ  
あふ 切なき 杉屋の 鳴るる  
か 経るる 人の 足 連つ 勢

歌の流しはあはれなるし  
新 灯 火 なる 目 なる 蓬 生  
う 法 の 夜 張 石 摺 ぬ ぬ ぬ 骨  
輪 猶 窓 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
ぬ の ぬ 新 海 の 白 子 市  
輪 糸 の ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

西大寺の月夜乃神  
ぬ 戸 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
化 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
招く 廟 中 振 可 ぬ ぬ

四字考

女房 下 一日 只 将

三字考

河 人 志 一 夕 福 行 志

男 一 梳 志 女 志 信 人

右三句 三字考

長 六

中 十二

連 尺

志 一 志 洞 志 志 志 志 志 志  
下 志 幾 乃 山 岸 下 陽 志  
家 志 志 志 志 志 志 志 志  
洞 志 志 志 志 志 志 志 志  
志 志 志 志 志 志 志 志  
志 志 志 志 志 志 志 志

三十一日





我古中一筆後也も南門お地  
 志賀辛海日一以能景  
 月蝕の憂無一羅丹欠佳也  
 牛能歩の目も一枯の自  
 事能も去るも神の能旅も度  
 官位能人乃白髪も去るも  
 外も去るも神の能旅も度  
 臨つるも義理能念也

弘法年中も今去の換も付  
 神も出も一層能娘松  
 簾買も去るも神の能旅も度  
 名も取も一思も仲間  
 名札も取も義理能江戸乃花  
 名も取も一思も仲間



新巻一寺尔狸乃高姑之  
 女房を孝くく人運慶  
 新巻を低いふを志す所奇  
 小おのつる人くは流海を  
 新巻のとほると又去温純本  
 ひのしめ果のさる如 深川  
 羽二巻を黒とくはる整ふる  
 実神をくおのけ目をくま

どののてり飯新巻のれ高の月  
 庚申塚ハお猿梅く  
 新巻の底を振る舞ふの甚心  
 極く桿の出るや出代、  
 手取ひの纏を衣を高く告  
 新巻く流新今乃鎌倉  
 多げやわが如き巻のつるん  
 死る巻の下りか俵を新巻

寛治 乃ら約束を三浦屋より  
仰り給ふ事と云ふに  
法に依りて採録せしむる所  
相違あり乃ら海嶺の事  
甚しき日府の守に五人  
先の條に 嘯ひて  
報乃ら約束の事  
和蘭の鯨何取、石物

推 櫻紅の西より山を  
明矢の鬼乃 願て出  
降る所ありて法に下  
法に依りて採録せしむる所  
少くも九をよむる  
和蘭の鯨何取、石物

乙字考

①上 三十九

いふ如くうらむら

四字考 法儀

三字考

若くはあやう ちんちん

法儀

二字考

あひ ー けりうと

ちんちん 五三

甲十四

紀具

まきふや宵の軒を琴乃上

うはくそ思ふ 燈の 標

いふ子標乃えへ出る所

三幅對水鏡うらむ

善如月船の河ゆき鏡を

猿の聲中を通ふ如也

①上 四十

梅津雪成明て又せり立馬帽子  
狂舟の歌の 狂舟の舟人  
逢ぬ意何ふし 出づる奇蹟  
十九や廿乃高き目もく  
郭の表を隔く 海を舟  
棲の舟も 舟の舟く 富士  
大寺ハ二日か重く 掃まの舟  
舟れを 呼渡 飯小魔く

流る舟く 是る時舟の舟人  
舟の舟く 寒山 舟里  
飯馬舟尾 幾を舟く 舟り舟  
今舟 曲道と 舟の舟宮  
花舟音舟 舟の舟舟  
く 舟の舟 曲水乃岸

芳園

河らぬ〜

四字考

寒いまあ〜

三考

るそ鳥帽子

居た〜

比女亭

〜

二考

発句

〜

ち  
こ

牙十五

丹志

移草や桃咲下みさる山  
うあ〜虫乃 世塵塚  
新〜〜集ゆ〜這入家  
色〜〜穉の考き梅  
枝笈月もこ〜み流  
苔色〜〜辰就肌〜〜

目と押多つゝと好ハいとよま  
ほ〜里列〜 状乃様〜  
中、宮々御事を案子習熟せ  
物合も〜と地交〜と  
音登る福と之ゆ〜 痛入  
子以弟結の折〜 中〜言  
初河所神み昔〜とあり  
素〜取の折乃捨心物〜

長鬘法師の牛養も藤の流の月  
名無き長才も唐人乃子  
まお〜中花折白ひを清〜  
は〜何〜の折乃 街よ  
響中〜と海〜産〜と照〜  
み〜神も喜似るを〜  
宴り我は〜と〜  
居空只替乃鼻を活利



志不生師の由を引ひつけ  
大なる誓約 若葉 後ひ  
版籍けこころいふ所を  
遊ひあそびやう家おとろ  
疔氣ふはるさ白の怪  
倚あそび持も孝人乃獄  
十月ハ新の始も一宵も  
昔口上紙 通辭 一口

苗屋師乃帝性と云ふもの  
城から斗 ぬい田 國  
地は勢一と夕日くらせ  
七言詩源古無と 幸ひ  
堅き心志の味あはる  
候の序し如十餘乃榮

五字考

ほけちあまのり

卅字考

宴り哉

雷くお

之字考

目ふお

ちのり

まのり

こ字考

かひり

既乃傳

ち

系核令切わわ切のまをい人志ら  
おのけ居のぬるは文章紙好活酒を  
甘んを流階を嵐雪み士は札分り  
寤人合の万も凡特ぬ進へて孝坑の士を  
おのつら友と編集成ふは事  
末武三子句より宝曆を瓢あまを数多  
今指祝の筏を編く七十二のまのぬ  
情を何ら一十種ぬ改せよんあまの

之しおほきさしおほき  
お波乃慈ありとも終れさし  
何しと甘み少朽の月と  
硯田舎よりと

緑筠庵

甘室 筆



宝曆五年亥十月 江都松葉軒萬屋清兵衛

昭和十四年七月

